

# マクデブルクのメヒティルト著 『神性の流れる光』の社会的背景 8 — 教皇の首位権 (5) —

狩野智洋

## 1. 序

ケレスティヌス 1 世 (Coelestinus I, 在位 422 - 432) の次に教皇の首位権確立に向けて尽力したローマ司教は 8 年後に就任したレオ 1 世 (Leo I, 在位 440 - 461)<sup>1</sup>であった。レオ 1 世は後のグレゴリウス 1 世 (Gregorius I, 在位 590 - 604) と並び「大 (magnus)」という名誉称号を与えられているただ 2 名の教皇の 1 人である<sup>2</sup>事が示唆するように、ローマ司教の権威拡張に大きく貢献した。その際彼は新たな資料からの類推や根本的に新しい動機を追加するのではなく、それまでの 300 年間に収集された要素を体系的に組み合わせ、論理的に矛盾しないように、そして大胆に利用したのであった。<sup>3</sup>また、ローマ及び西ローマ帝国を取り巻く状況も彼に有利に働いたと言える。

本稿では、主として彼の宗教的・政治的業績に就いて考察したいと思う。

---

1 レオ 1 世については主として以下の文献に拠った。

Goez, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. Darmstadt, 2009. S.8 - 10. Reinhardt, Volker: Pontifex. Die Geschichte der Päpste. München, 2018. S. 79 - 87. Studer, Basil: Leo I. In: Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. (以下 TRE と略記) Berlin, New York, 1993-2006. 20, S. 737 - 741. Wyrwa, Dietmar: Leo I. In: Religion in Geschichte und Gegenwart. Handbuch für Theologie und Religionswissenschaft. Vierte, völlig neu bearbeitete Auflage. Ungekürzte Studienausgabe. (以下 RGG と略記) Tübingen, 2008. 5, Sp. 264f. Schieffer, Rudolf: Leo, 3. L. I. In: Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. (以下 LM と略記) Stuttgart, Weimar, 1999. 5, Sp. 1876f. Price, Richard: Leo I. In: Louth, Andrew (edit.): The Oxford Dictionary of the Christian Church. Fourth edition. (以下 ODCC と略記) Oxford, 2022. 2, S. 1120.

2 Vgl. Wyrwa, Dietmar: Leo I. Sp. 264. Goez, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. S.8

3 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.79.

## 2. 首位権の根拠を確立したレオ1世

レオ1世はローマ司教の首位権を主張する際に、ペトロが初代ローマ司教であったとする伝説とヒッポの司教アウグスティヌス（Aurelius Augustinus Hipponensis, 在位 395 - 430、但し 395/396 は協働司教）の『神の国（De civitate Dei）』（412/3 - 426/7）の内容を大胆且つ巧妙に組み合わせている。『神の国』の内容にはかつてアウグスティヌス自身が一時信仰したマニ教の影響が見られるので、先ずはマニ教について概観したい。

### 2.1. マニ教

マニ教<sup>4</sup>に関しては19世紀迄は専らアウグスティヌス等マニ教を批判する側の文献に拠らざるを得なかったが、1904年にトルファンで、1930年、1970年及び1991年にエジプトでマニ教徒の残した文献が発見され、現在ではマニ教に関してより詳細で信頼性の高い情報を得ることができる状況となっている。<sup>5</sup>

マニ（Mani, 215/6 - 277）は、霊肉二元論のグノーシス主義に基づき、罪の浄化のために洗礼を頻繁に行うエルカザイ派に属するか、又はそれに極めて近いと思われるメソポタミアのユダヤ人キリスト教徒の一派に属しており、マニ自身の禁欲的傾向及び終末論的方向性に影響を与えたと考えられる。<sup>6</sup>彼は自分が属していた宗派を改革しようとしたが挫折し、二度の幻視（228/229年と240年）に基づき、240年にキリスト教、ゾロアスター教及び仏教の諸要素を取り入れた極めて二元論的・グノーシス主義的な世界観を持つ世界宗教を創設した。<sup>7</sup>そ

---

4 マニ教については主として以下の文献に拠った。

Böhlig, Alexander: Manichäismus. In: TRE. 22, S. 25 - 45. Oort, Johannes van: Manichäismus. In: RGG. 5, Sp. 732 - 741. Rudolph, Kurt: Manichäismus, Manichäer. In: LM. 6, Sp. 194ff. Rottenwöhler, Gerhard: Manichäismus, Manichäer, Mittelalterliche Ketzerverzeichnung. In: LM. 6, Sp. 196. Young, Frances: Mani (or Manes) and Manichaeism. In: ODCC. 2, S. 1204f.

5 Vgl. Oort, Johannes van: Manichäismus. Sp. 732ff. Rudolph, Kurt: Manichäismus, Manichäer. Sp. 195. Young, Frances: Mani (or Manes) and Manichaeism. S. 1204f. Böhlig, Alexander: Manichäismus. S. 26ff.

6 Vgl. Böhlig, Alexander: Manichäismus. S. 28.

7 Vgl. Rudolph, Kurt: Manichäismus, Manichäer. Sp. 194. Böhlig, a.a.O.

の教義は複雑な神話で語られるが、以下にその要点のみを述べる。<sup>8</sup>

先ず始めにそれぞれ独立して光の国と闇の国があり、光の国は純粹、光、力、英知という4種の特質を持ち、理性、思考、理解、熟慮、熟考という5種の要素（住居）を持つ「偉大さの父」が治める。闇の国は闇の王が恣意的に支配するが、そこには煙、火、風、水、闇の5領域があってそれぞれにアルコン即ち最高執政官がおり、この5人のアルコンの集合体の人格化したものが闇の王である。更には数多くのデーモン達が働き、常に互いに争い絡み合っている。この5領域の無秩序な運動によって偶然闇の王が自領の最上の境界に達した時、光の輝きを目にしてその命を手に入れようと、光の国を攻撃する。それに続く戦いに於いて光の父は「命の母」を呼び出し<sup>9</sup>、「命の母」は更に「最初の人間」を呼び出す。最初の人間は、彼の生ける魂或いは生ける自己とも呼ばれる、大気、風、光、水、火という光の5要素の甲冑を着けて戦いに赴くものの、敗れて意識を失い、深みに倒れ、五重の甲冑は悪の勢力に貪り食われる。

生ける自己、光の十字架に付けられた自己、特に西欧では苦しみを受けるイエスに体现されるこの最初の人間は、敗北の結果、救済されなければならなくなる。そこで光の父は先ず、光の恋人を呼び出し、光の恋人から偉大な建築家が出て、偉大な建築家は命の父とも呼ばれる生ける精神を生み出す。生ける精神には最初の人間と同様5人の息子がいる。生ける精神が光の世界の最も低い境界から「呼び声」を送ると最初の人間が目覚めて返答する。そこで生ける精神は自分の5人の息子及び命の母と共に最初の人間の元へ降りて行き、彼を光の世界へ連れ戻す。

神の魂と悪しき物質との結びつきによって依然として囚われたままの光を救

---

8 教義に関しては主に以下の文献に拠る。

Böhlig, Alexander: Manichäismus. S. 31ff. Oort, Johannes van: Manichäismus. Sp.736ff. Rudolph, Kult:Manichäismus, Manichäer. Sp.195.

9 オールトは、生殖を暗示するいかなる要素をも排除することで、悪と結びつけられる性行動の暗示を厳格に避けるために「呼び出し (Hervorrufen)」という言葉が使われている点を指摘している。Vgl. Oort, Johannes van: Manichäismus. Sp.736f.

うため、生ける精神が5人の息子と協力して10の天と8の地を造る<sup>10</sup>。太陽と月は闇に汚されていない純粋な光の器であり、惑星や星々は闇に汚された物質からできた悪しき支配者である。この様に闇の勢力の牢獄であり、神の魂が閉じ込められている場所でもある世界が創造されて救済のプロセスが開始される。偉大さの父は、依然として闇の勢力の体の中に閉じ込められている光を救出し、浄化する使命を負った第三の使者を創出する。第三の使者は彼の女の分身、光の処女と共に、天に捕らえられた男女の闇のアルコン達の欲望を利用して、貪り食われて特に彼らの精子と子宮に集積している光を再び放出するように仕向ける。黄道十二宮に対応した光の処女の化身の12人の美しい処女の姿を目にすると、男のアルコンの「罪」即ち精子が地上に落ち、乾いた地面に落ちた精子からはあらゆる植物の元となる5本の木が芽生えた。自らの悪しき性質によって身籠もった女のアルコン達は第三の使者の裸体を見て興奮し、胎児を地上に産み落とす。これらの胎児は生き延び、男のアルコン達の精子から生じた木々の実を貪り食う。性欲に駆り立てられた早産児達は性交して無数の動物種を産み出す。救済されなかった光はそうして地上に移され、そこで分散され、動物の体内よりも多くが植物の中で拘束される。

光の救済を続行するため、第三の使者は、新たな、完全な男と呼ばれる栄光の柱を生み出し、更に「光の船」即ち太陽と月の運動を開始させる。太陽と月は偉大な建築家が造った新たな楽園へと光を運ぶ。これに闇の勢力は怯え、捕らえた光の粒を少しでも留めておこうとし、最初の人間の一对、アダムとエバを造った。従って人間はデーモンの被造物であるが、人間はデーモン達が天で見た第三の使者の姿、詰まるところ神の姿に似せて造られた。その為人間は二つの世界に属しているが、当初は自らの高貴な出自を自覚していない。輝く者、イエスがアダムに救済を齎す認識を届けるために降りてくる。このイエスの啓示は将来徐々に行われる人間の救済の原形である。この光の救済を齎すために

---

10 この点に関してオールドは、この創造行為が悪の造物主によってではなく、光の神によって行われた点に注目し、これによって宇宙の秩序がマニのグノーシス主義的教義に沿って神の摂理に帰する、と指摘し、更に、宇宙を創造する為には光と闇の混合という本質を持つ材料が必要となる、と述べている。Vgl. Oort, Johannes van: Manichäismus. Sp.737.

イエスは光理性を任命し、光理性は仏陀、ツァラトウストラ、救世主イエス・キリストといった偉大な宗教的指導者に化身する光の使徒を呼び出す。

最後に善と悪の大戦が起こり、真の宗教の律法に従うことにより光が救済され、光と闇は永遠に分離される。

オールドは、マニの教義には二つの原理と三期の時期、即ち、二つの国が混ざり合い戦う以前の時期、まさに現在の世界が呈している混合期、その後二つの世界が再び且つ最終的に分離して存在する時期がある、とまとめ、更に、その本質は、νόος (理性、天の啓示) が ψυχή (魂、人間の中にある神の一片の光) を ύλη (物質、悪しき物質) から救済するという点にあり、典型的なグノーシス主義である、と述べている。<sup>11</sup>

## 2.2. 『神の国』

アウグスティヌス<sup>12</sup>は354年にローマ帝国領北アフリカのタガステ(Thagaste、現在のアルジェリアのスーク・アフラス (Souk Ahras)) に於て、市の参事会員で、死の直前に受洗するまで異教を信仰していた父パトリキウスと熱心なキリスト教徒の母モニカの間生まれ、当初から彼をキリスト教に導こうと努めた母によって、誕生後間もなく十字と塩で洗礼準備の儀式を施された<sup>13</sup>。

---

11 Vgl. Oort, Johannes van: Manichäismus. Sp.738.

12 アウグスティヌス及び『神の国』に関しては主として以下の文献に拠った。

Schindler, Alfred: Augustin/Augustinismus I. In: TRE. 4, S. 645 - 698. Mühlberg, Ekkehard: Augustin. In: RGG. 1, Sp. 959 - 967. Oesterle, Hans-Joachim / Schmaus, Michael / Binding, Günther: Augustinus, I. A. (I. - IV.). (Oesterle: I. Leben, II. Werke. / Schmaus: III. Fortwirken im Mittelalter. / Binding: IV. Ikonographie.) In: LM. 1, Sp.1224 - 1229. Harrison, Carol / Draghici, Bogdan-Gabriel: Augustin, St. of Hippo. In: ODCC. 1, S.149 - 152.

Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. Lateinisch und Deutsch. Eingeleitet, übersetzt und erläutert von Josef Bernhart. Mit einem Vorwort von Ernst Ludwig Grasmück. 1. Aufl. Frankfurt/M und Leipzig (insel taschenbuch 1002), 1987. Augustinus, Aurelius (Dombart, Bernhard (Hrsg.)) : De civitate Dei. I., II. Leipzig (in aedibus B. G. Teubneri), 1877.

13 Vgl. Schindler, Alfred: Augustin/Augustinismus I. S.646. Mühlberg, Ekkehard: Augustin. Sp. 959. Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. S.38.

タガステで初等学校に通った後、アウグスティヌスは近くの町マダウロス (Madauros) で文法を学ぶための学校に通ったが、経済的理由で中断してタガステに帰り、371年にカルタゴに行き哲学を含む修辞学を学び成功した。また、恐らく第1学年から女性と同棲を始め、372年頃には息子をもうけ、この同棲は15年間続くことになる。373年、彼が19歳の時<sup>14</sup>に、キケロ (Marcus Tullius Cicero, 前106 - 前43) が哲学の勧めを説いた『ホルテンシウス』 (Hortensius, 前45年) を授業のテキストとして読み、彼に転機が訪れた。それ以来彼は真理の探究に熱中した。彼は聖書も紐解いたが、当時のラテン語訳聖書の言葉に魅力を感じることは出来ず<sup>15</sup>、間もなく373年から382年まで「聴聞者 (auditor)」としてマニ教を信仰した。マニ教によって道理に適った真理、悪の起源に関する合理的な知識を得ることができると期待してのことであった。<sup>16</sup>

その後375年にタガステで文法学の教師となったが、翌376年にはカルタゴに戻って修辞学の教師として地歩を固めた。382年に、マニ教に関する疑問を解くため以前から待ち焦がれていたマニ教の司教ファウストゥス (Faustus) にカルタゴで会ったが、納得の行く回答が全く得られずに内心マニ教に失望したものの、外面的な決別には至らなかった。383年ローマに移り住んだが、その翌年384年にはミラノ市の修辞学教師 (rhetoricae magister) の職を得た。ローマへの移住を支援したのも、ミラノでの修辞学教師の職を得られるよう働いたのもマニ教信者の友人達であった。<sup>17</sup>

ミラノでアウグスティヌスは決定的な経験をする。まずは当時のミラノ司教アンブロシウス (Ambrosius Mediolanensis, 在位374 - 397) の説教に感銘を受ける。当初はその修辭的な面に魅了されたものの、アンブロシウスがその旧

---

14 ドラギチはこの時のアウグスティヌスの年齢を18歳としているが、シンドラーは根拠を挙げて19歳であるとしており、彼が指摘している『告白録』の第4巻11章18節でも19歳 („ab undevicensimo anno aetatis meae“) と明記されている。Vgl. Draghici, Bogdan-Gabriel: Augustin, St. of Hippo. S. 149. Schindler, Alfred: Augustin/Augustinismus I. S.647. Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. S.280.

15 Vgl. Draghici, a.a.O. Mühlenberg, Ekkehard: Augustin. Sp. 960.

16 Vgl. Mühlenberg, a.a.O.

17 Vgl. ebd. Oesterle, Hans-Joachim: Augustinus I. Sp. 1224. Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. S.232.

約聖書の寓意的解釈によって、かつては魅力を感じていなかった旧約聖書の言葉の「神秘のヴェールを取り払い、霊的な意味を明らかにしてくれた (remoto mystico velamento spiritaliter aperiret)」<sup>18</sup> ことで、アウグスティヌスをよりキリスト教へと近づけ、洗礼準備教育を受けるに至らせた。また、プラトン哲学を継承しつつ、世界は「一者」から流出したのであり、自己の源流であるこの「一者」に「合一」すべきであると説く新プラトン主義最大の哲学者プロティノス (Πλωτίνος, 205 - 270) を熱心に読んでいる信徒達と出会い、自らも熱心に新プラトン主義の書物を紐解いた。この頃彼の母親は彼と同棲していた女性を故郷へ帰し、代わりに彼の出世に良い影響を齎す 12 歳の少女を彼の花嫁にしようとしたが、彼はこれを回避した。彼は近隣の子供が遊びで歌った歌詞 (「手に取って、読め。手にとって、読め (Tolle, lege; tolle, lege.)」<sup>19</sup>) に触発されてパウロの「ローマの信徒への手紙」13 章 13-14 節を読んで世俗への執着を断ち、386 年 8 月 1 日頃に回心して、387 年の復活祭にアンブロシウスによって受洗した。その後アフリカに旅立ったが、途中で母親を亡くし、翌 388 年秋にカルタゴを経てタガステに帰った。そこで彼は友人達と修道的な生活を送った。391 年にヒッポに滞在中、彼は意に反して司祭に叙階された。その後 400 年頃までマニ教との対決に注力する。<sup>20</sup>395/6 年にヒッポの司教ウァレリウス (Valerius, 在位 - 396/7) の協働司教となり、396/7 年にウァレリウスの死によって単独司教となった。前稿でも触れた様に、アウグスティヌスはマニ教の他に、ドナトゥス派やペラギウス派とも論争し、カトリック教会の擁護に尽力した。<sup>21</sup> ヴァンダル人がヒッポを包囲している最中の 430 年 8 月 28 日にアウグスティヌスは息を引き取ったが、それ以前の 410 年にローマがアラリック 1 世率いるゴート族に三日三晩に渡って略奪された際に彼はローマに滞在していた。この時異教徒の貴族

18 Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. S.254.

19 Augustinus, Aurelius: Bekenntnisse. S.414.

20 Vgl. Oesterle, Hans-Joachim: Augustinus I. Sp. 1225.

21 Vgl. 狩野智洋 「マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 7」『言語文化 社会』第 21 号 (学習院大学外国語教育研究センター) 2023 年 1 - 20 頁。該当箇所は 12 頁。

達はゴート族の侵攻をキリスト教の責任に帰したが<sup>22</sup>、これに対する反論としてアウグスティヌスが著したのが『神の国』である<sup>23</sup>。以下にその概略を述べる。

アウグスティヌスは先ず始めに異教の神々がこの世の幸福を叶えることができないことを論証し、次いで、異教の道が来世の幸福へと導くことができない理由を説明する。その後彼は、錯誤と誤謬の原因は（神や教会及び聖書の）権威（*auctoritas*）を信じる事に拠らずに至福を感じさせる知識を求め、神と人の仲介者であるキリストを拒否する、人間の自己の力を頼む高慢さにあるとしている。神への愛（*amor dei*）と自己愛（*amor sui*）がそれぞれ「神の国（*civitas dei*）」と「悪魔の国（*civitas diaboli*）」という二つの共同体を築いており、この二つの国は、人類の歴史が始まる以前に精神的な観念的領域で全く逆の意志によって生じた。時間の中に於ける人類の歴史は、神の計り知ることのできない恩寵によって何人かの人間が神の国の住人になると定められていなかったならば、自己愛に陥った罪深い人間の歴史にならざるを得なかった。歴史時代には二つの国は「混ざり合った（*permixtas*）」ままであり、それが分離されるのは歴史の最後で、楽園に行くか地獄に行くかが決まる時である。但し、自己愛は可視的なものへと向かうので、自己愛に基づく「地の国（*civitas terrena*）」（＝「悪魔の国」）が歴史を越えることはない。

現在の歴史世界を二つの「国」の混合した状態であると見做す点はマニ教の神話に述べられている事と一致していると言えよう。しかしミュールンベルクは、アウグスティヌスの歴史神学（*Geschichtstheologie*）は二元論的であるが、悪しき意志の起源を被造物の領域（墮罪）に設定しているので、形而上学的二元論を避けている、と指摘し、また、悪しき意志の区分とその存在に係わるカテゴリーによって、歴史が二つの勢力が戦う場と見做されることはない、と述べて、マニ教の神話に語られる「光の国」と「闇の国」の二元的対立との相違を示唆している。<sup>24</sup> とは言え、『神の国』はマニ教の「光の国」と「闇の国」の

---

22 Vgl. 前掲書 11 頁。

23 Vgl. Mühlberg, Ekkehard: Augustin. Sp. 965. Oesterle, Hans-Joachim: Augustinus II. Sp. 1226f. 『神の国』の概略については特にミュールンベルクの上記箇所を参考にした。

24 Vgl. Mühlberg, a.a.O.



構図をアウグスティヌスがキリスト教的に発展させたものと見ることが出来る。

### 2.3. ローマ司教の首位権に関するレオ 1 世の論拠

レオ 1 世によるローマ司教の首位権主張の論拠では、それ以前に盛んに喧伝されたペトロが初代ローマ司教であったと言う主張とアウグスティヌスの『神の国』で展開されている主張とが大きな役割を果たしている。以下にその概略を述べる。<sup>25</sup>

神の言葉が妨げられる事なく広められる為に、世界を征服し一つの帝国にまとめるようにと、神の摂理がローマを選んだ。異教の軍司令官や皇帝達は全くそれとは知らずにこの使命を遂行し、その成功を自分達の想像上の神々や自らに帰した。自惚れと血と欺瞞に基づいたこの帝国内で、悪しき支配者達によって初めは無視され、後に迫害されながらも、福音によって世界を平和的に征服する事のみを心に願っている、平和的な対立国家がキリスト教会という姿で発展した。教会も自分達の国を教区に区分した。使徒の序列で首位者であるペトロに、当然、世界帝国の首都ローマが活動の場として割り当てられた。世界の回心は世界の最上かつ中心がその出発点とならなければならないからである。ペトロの指導的立場は人間による任命ではなく、結びまた解く鍵を彼にのみ委ねたキリストに直接由来する。ローマ司教が司法権を司教達に委ねているように、ペトロはこの全権を他の使徒達に更に渡し、彼らも全権を行使した。これによって司教達はローマ司教に対し、他の使徒達がペトロに対するのと同様の関係、即ち、同じであると同時に同じではない、という関係にある。司教達と弟子達は彼らの首長と同じ権限を有するが、しかし自らの権利によってではなく、その委譲によってである。ローマ司教のみが自らの名で聖ペトロの代理人として支配するのであり、他の司教達はその委託によって職務を執り行うのである。その権力の行使に於いてローマ司教はペトロとなる。ローマ司教は引き

---

25 レオ 1 世の論拠の概略は、シュトゥーダーを参照しつつ、主としてラインハルトに拠った。Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 79ff. Studer, Basil: Leo I. S. 740

継ぐ遺産によって、被相続人と本質を同じくする。教会の長（*princeps*）としてローマ司教は使徒の長の統治権（*principatus*）を有するのだ。

即ち、レオ1世の論拠によって単なる権威が包括的な法的権限に変質したのである。<sup>26</sup> ラインハルトは更に、ペトロはローマにいてローマから教会を統治したが、当時ローマは異教の首都であり、ペトロは恐れることなくこの悪の巣窟に突き進み、ネロが彼の地上の生活を終わらせるまで神の真理によってそこを満たし、その死によっても彼によって述べ伝えられた教えは途絶えることはなかった、とする主張を紹介し<sup>27</sup>、続けて次のようにまとめている。

これによって、神の国と悪魔の国という、アウグスティヌスの二つの国が直接ローマに関連付けられる。異教のローマはキリスト教のローマによって悪魔払いされ、こうして搾取と抑圧の帝国の中心から新エルサレムへと昇格されるのである。<sup>28</sup>

レオ1世のこの論拠には、ローマ司教の教会内での首位権の主張以上のもう一つの重要な主張が含まれている。即ち、「異教のローマ」が「キリスト教のローマ」に変わり、ローマが「搾取と抑圧の帝国の中心」から「新エルサレムへ」に変わるという思想には、正に「教皇のローマが帝国の遺産を引き継ぐ（*Das päpstliche Rom tritt das Erbe der Imperatoren an*）」<sup>29</sup> という意味が含まれており、「教皇達の教会と政治の領域に於ける帝国の野心を正当化するのに非常に適して（*bestens dafür geeignet, die imperialen Aspirationen der Päpste in Kirche und Politik zu rechtfertigen*）」<sup>30</sup> いたのであり、「皇帝達から教皇達への政権交代（*der*

---

26 Vgl. Reinhardt, Volker: *Pontifex*. S. 80.

27 vgl. ebd.

28 ebd. „Damit werden die zwei *civitates* Augustins, die Reiche Gottes und des Teufels, unmittelbar auf Rom bezogen. Das heidnische Rom wird durch das christliche exorzisiert und auf diese Weise vom Zentrum eines Ausbeutungs- und Unterdrückungs-Imperiums zum Neuen Jerusalem erhoben.“

29 Reinhardt, Volker: *Pontifex*. S. 80f.

30 Reinhardt, Volker: *Pontifex*. S. 80.

Machtwechsel von den Kaisern zu den Päpsten)』<sup>31</sup>が意図されていたのである。皇帝に残されたのは「この祝福に満ちた霊による支配に外的な保護を与えるという副次的な役割 (die untergeordnete Rolle, dieser segensreichen Geist-Herrschaft den äußeren Schutz zu spenden)」<sup>32</sup>のみである。レオ 1 世がこの様に政治的な統治権をも意識するようになったのは、西ローマ帝国皇帝権が著しく弱体化し、ローマ司教が実質的にローマに於ける政権の代理人としての役割を果たし、直接的な政治権力が与えられていた事も大きく影響していると考えられる。<sup>33</sup>

彼はこうした考えを典礼や経済及び政治の領域で、現実的に可能な限り、実現しようとした。

### 3. レオ 1 世の活動

#### 3.1. ローマ司教の政治的重要性の高まり

西ローマ皇帝ホノリウスの妹ガッラ・プラキディア (Galla Placidia, 390 頃 - 450) <sup>34</sup> は、410 年西ゴート族がローマを略奪した時人質として捕われた <sup>35</sup> が、その後間もなく西ゴート王アラリック 1 世が死んだ後、414 年にホノリウスの同意も得て、アラリック 1 世の後継王で親ローマのアタウルフ (Athaulf, 在位 410 - 415) <sup>36</sup> と結婚した。しかし翌年バルセロナでアタウルフが暗殺されると彼女はラヴェンナに戻り、ホノリウスの命により、彼の元で將軍となり共同統治者ともなったコンスタンティウス 3 世 (Constantius III, - 421, 在位 421) と結婚し

---

31 Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 81.

32 ebd.

33 Vgl. Goetz, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. S. 8. Wyrwa, Dietmar: Leo I. Sp. 265. Schieffer, Rudolf: Leo, 3. L. I. d. Große, Papst. Sp.1876. 北原敦 編：イタリア史 (新版 世界各国史 15) 東京 2017 年 119 頁。

34 ガッラ・プラキディアについては以下の文献も参照した。

Klein, Richard: Galla Placidia. In: LM. 4, Sp. 1092.

35 プラキディアが人質として捕らわれた年を 408 年とする説もある。 Vgl. Gruber, Joachim: Athaulf. In: LM. 1, Sp. 1162.

36 アタウルフについては上注の文献も参照した。Ebd.

た。この二人の間に生まれたのがヴァレンティアヌス3世 (Valentianus III, 419 - 455、在位 425 - 455)<sup>37</sup>とその姉ホノリア (Honorina, 417/8 - )<sup>38</sup>である。ヴァレンティアヌス3世はホノリウスの死後西ローマ正帝となったが、5歳という幼年のためプラキディアが426年から437年迄ボニファティウス (Bonifatius) やフェリクス (Felix)、アエティウス (Flavius Aëtius, 390頃 - 454)<sup>39</sup>と言った有力な将軍達に支えられて西ローマ帝国を統治した。

西ローマ帝国はこの間ヴァンダル人の侵入によってアフリカの極めて重要な諸州を失い、スペインでは東部の諸都市以外の支配を失い、ブリタニアについては422年に完全に失っていた。ガリアはかつて西ゴート族、後にフン族の元で人質として生活し、両者に関する知識の豊富なアエティウスが、フランク、ブルグント及び西ゴートに効果的に介入して安定を保っていた。<sup>40</sup>

一方で370年頃にヴォルガ川を越えたフン族では、ルア (Rua, 在位 432 - 434) が432年に恐らくパンノニア東部でヨーロッパのフン族を統一した後、その甥のアッティラ (Attila, 在位 434 - 453) が兄のブレダ (Bleda) と共同統治するが、間もなくブレダ殺害により単独統治となり、ルアに続いて度々東ローマ帝国を攻撃して東ローマ皇帝テオドシウス2世 (Theodosius II, 401 - 450, 在位 408 - 450) に434年には毎年350ポンド、448年には賠償金として6000ポンドと年貢として2100ポンドの金を貢納させる事で合意した。<sup>41</sup> フン族は西ローマ帝国とは428年アエティウスがパンノニアの一部をフン族に割譲してか

---

37 ヴァレンティアヌス3世については以下の文献も参照した。

Klein, Richard: Valentianus, 3. V. III. In: LM. 8, Sp. 1388.

38 ホノリアについては以下の文献も参照した。

Klein, Richard: Honorina. In: LM. 5, Sp. 118f.

39 アエティウスについては以下の文献も参照した。

Wirth, Gerhard: Aëtius, Flavius. In: LM. 1, Sp. 193.

40 Vgl. ebd. Klein, Richard: Valentianus, 3.V. III. Sp. 1388.

41 フン族については以下の文献も参照した。

Bóna, István: Hunnen. In: LM. 5, Sp. 222ff. Wirth, Gerhard: Rua. In: LM. 1, Sp. 1067. Wirth, Gerhard: Attila. In: LM. 1, Sp. 1179f.

らは良好な関係を保っていたが<sup>42</sup>、450年東ローマ帝国でテオドシウス2世の後を継いだ軍人出身のマルキアヌス (Marcianus, 396 - 457, 在位 450 - 457)<sup>43</sup>に貢納を拒否され、また更に、西ローマ皇帝ヴァレンティアヌス3世の姉ホノリアが既に444年頃に宦官を通じてアッティラに伝えた彼女自身との結婚の密約がこの頃皇帝に発覚し、結婚を阻止されると同時に西ローマ帝国を共同統治するという期待が裏切られるとフン族は西進を開始し<sup>44</sup>、451年にカタラウムの戦いでアエティウス率いる西ローマ・西ゴート・ブルグント・フランク連合軍に敗れた<sup>45</sup>。その後アッティラが452年に北イタリアを攻略した後ローマへと向かった際に、皇帝の使節団と共にローマ司教レオ1世が北イタリアのマントヴァ (Mantova) 近郊で彼と交渉し、アッティラはその説得にあっさり応じたとされているが、しかし、東ローマ皇帝マルキアヌスがドナウ川沿いの彼の王国を攻撃したため、即時の撤退を余儀なくされたと言うのが実情のようである<sup>46</sup>。何れにしても、この説得は後世レオ1世の大きな功績とされている。<sup>47</sup>

権力を増したアエティウスを疎ましく思ったヴァレンティアヌス3世は454年に謁見の際に自ら彼を刺し殺した半年後、アエティウスの信奉者によってローマで殺害された。<sup>48</sup>455年にヴァレンティアヌス3世の死後ガイゼリック (Geiserich, 390頃 - 477, 在位 428 - 477) に率いられたヴァンダル人がローマを襲った時もレオ1世が使者として立ったが、今回は成功せず、放火や住民の殺害は免れたものの2週間に渡って略奪の限りを尽くされた。<sup>49</sup>

上記は外交的な業績であるが、内政的には市民への食料援助の問題があった。ローマの安定のためには、住民の半数を超える、最低限の生活を強いられてい

---

42 Vgl. Wirth, Gerhard: Attila. Sp. 1179.

43 マルキアヌスについては以下の文献も参照した。

Klein, Richard: Markianos, oström. Ks. In: LM. 6, Sp. 305f.

44 Vgl. Wirth, a.a.O. Klein, Richard: Valentinian, 3.V. III. Sp. 1388. Klein, Richard: Honoria. Sp. 118f.

45 Vgl. Wirth, a.a.O. Klein, Richard: Valentinian, 3.V. III. Sp. 1388. Wirth, Gerhard: Aëtius, Flavius. Sp. 163.

46 Vgl. Bóna, István: Hunnen. Sp. 223. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 87.

47 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 85ff.

48 Vgl. Klein, a.a.O. Wirth, a.a.O.

49 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 87. Klein, Richard: Geiserich. In: LM. 4, Sp. 1176.

た市民の不満を緩和する為にパンの価格を抑える必要があり、その為権力者達は穀物を無償で寄付することでローマの安定を維持しようとしてきたが、この役割が今や富を増大させていたローマ教会ひいてはその長であるローマ司教に益々移行し、それに伴って、権威と信奉も世俗的権力から宗教的権力へと移行した。<sup>50</sup>

この様に、レオ1世の時代には西ローマ皇帝皇帝権の弱体化に伴い、自ずと社会的にもローマ司教の権威と権力が高まる状況にあったと言えよう。

### 3.2. ローマ司教の権威拡大の試み

#### 3.2.1 西方教会に於ける首位権の確立

異教のローマをキリスト教のローマに変えるためにレオ1世が行った中には、当時まだ冬至の日に行われていた太陽崇拝をキリスト誕生の祭りに変える事で排除したという事があるが<sup>51</sup>、それよりも重要だったのは正統な教えを守るためにキリスト教内での異端を排除する事だった。特に、可視的世界の創造を悪魔によるものとし、キリストの受肉と最後の審判の日の死者の復活を否定するマニ教をレオ1世は地獄の信奉者として弾劾し、449年この意見を受けたウァレンティアヌス3世がマニ教徒の財産を押収し、ローマから追放した。<sup>52</sup>レオ1世はネストリオス派とペラギオス派にも同様の厳しい態度で臨んだ。<sup>53</sup>

またレオ1世は445年ウァレンティアヌス3世から、文書で西ローマ帝国教会内に於けるローマ司教の首位権の承認を得る事に成功した。<sup>54</sup>

---

50 この件に関してはラインハルトに拠った。 Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 81f.

51 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 81.

52 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 82. Schieffer, Rudolf: Leo, 3. L. I. Sp. 1876. Richard: Valentinian, 3.V. III. Sp. 1388. Goetz, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. S. 8.

53 Vgl. Reinhardt, a.a.O.

54 Vgl. Goetz, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. S. 9. Wyrwa, Dietmar: Leo I. Sp. 265. Price, Richard: Leo I. S. 1120.

### 3.2.2 東方教会への影響力の拡大

時代の趨勢がまたも、ローマ司教レオ1世にその影響力を東方教会へ及ぼす機会を与えた。431年に東ローマ皇帝テオドシウス2世(Theodosius II, 401 - 450, 在位 408 - 450)によって招集されたエフェソス公会議は、東方教会に於いてアンティオキア学派とアレクサンドリア学派の分裂をもたらした<sup>55</sup>ため、テオドシウス2世は432年末に護民官(tribunus)のアリストラウス(Aristolaus)にアレクサンドリア総主教キュリロス(Κύριλλος Αλεξανδρείας, 在位 412 - 444)とアンティオキア総主教ヨアンネース1世(Ιωάννης I, 在位 429 - 441/442)の仲裁を命じ、苦勞の末433年、ヨアンネース1世はキリストの神性と人性という二性の統合(των δύο φύσεων ἔνωσις)及びマリアに対する呼称として「神の母(Θεοτόκος)」を認め、更にコンスタンティノポリス総主教ネストリオス(Νεστόριος Κωνσταντινούπολης, 在位 428 - 431)の罷免に同意する事、一方のキュリロスはキリストの(本質に於ける)単一性(ἔνωσις καθά ύπόστασιν)という考えを放棄する事で妥協が得られた。<sup>56</sup>

しかし、当時の関係者達が死去して彼らの後継者達の時代に状況の変化が生じ、433年の合同(union)を守ろうとする意識が希薄になっていった。<sup>57</sup>キュリロスの後継者ディオスコロス(Διόσκορος Α' Αλεξανδρείας, 在位 444 - 451)は東方教会の主教団内でアンティオキア派の勢力が目立って増大する事に危機感を覚え、446年以降宮廷政治に広範囲に大きな影響力を振るっていた宦官宰相クリュサフィオス(Χρυσάφιος)を通じて事態を打開しようとしたが、それはクリュサフィオスが、300人の修道士が所属するコンスタンティノポリス近郊の修道院の院長兼司祭でアレクサンドリア派のエウテュケース(Εὐτυχής, 378

55 Vgl. 狩野智洋 「マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 7」14 - 16頁。

56 Vgl. Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. In: RGG, 2, Sp. 1349ff., hier Sp. 1350. Liébaert, Jacques: Ephesus. In: TRE, 9, S. 753ff, hier S. 754.

57 Vgl. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychianischer Streit. In: TRE, 10, S. 558 - 565, hier S.559f.

頃 - 454 以降)<sup>58</sup> の代子で、その影響を受けていたからであった。<sup>59</sup> 恐らくその働き掛けによって、テオドシウス2世は448年2月16日「ネストリオス派」を罰する勅令を発し、これをアンティオキアではアンティオキア学派の神学に対するものと見做し、争乱に発展しそうになったが、更に同年4月今度はディオスコロスがキュリロスの12のアナテマを承認するよう迫り、アンティオキア派は443年の合同を示してこれを拒否する展開となった。<sup>60</sup>

こうした流れに呼応したものと考えられるが、上記のエウテュケースはキリストの神性のみを認める単性説を唱え、キリストは受肉前は神性と人性の両性から成っていたが、受肉後は人性は神性に飲み込まれて単性となった、またキリストの人性は我々、他の人間の人性とは本質が異なると主張し、これを問題視したドリュライオン (Δορύλαιον, 現在のトルコのエスキシェヒル Eskişehir) の主教エウセビオス (Ευσέβιος Δορύλαιίου) が、448年11月8日コンスタンティノポリス総主教フラビアノス (Φλαβιανός Κωνσταντινουπόλεως, 在位 446 - 449) が議長を務め、コンスタンティノポリスに居合わせた司教のみの参加による教会会議で告発し、11月22日に同会議でエウテュケースは有罪とされ、罷免、破門された。<sup>61</sup>

これを不服としたエウテュケースは、不当な処遇を訴えると同時に、自分に対する告発と有罪判決に関する理由を述べた手紙を、規則通りにローマ、アレキサンドリアその他に書き送り、皇帝もレオ1世に手紙を送ってエウテュケースを擁護した。<sup>62</sup> レオ1世は直ちにフラビアノスに事情を問い合わせ、後者は

---

58 エウテュケースについては以下の文献も参照した。

Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychnischer Streit. Brennecke, Hanns Christof: Eutyches. In: RGG. 2, Sp. 1686. Biedermann, Hermenegild M.: Eutyches, 1. E. In: LM. 4, Sp. 122f. Young, Frances: Eutyches. In: ODCC. 1, S.667. Brennecke, Hanns Christof: Eutychnischer Streit. In: RGG. 2, Sp. 1686f.

59 Vgl. Brennecke, Hanns Christof: Eutychnischer Streit. Sp. 1686. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychnischer Streit. S. 559.

60 Vgl. Brennecke, a.a.O. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychnischer Streit. S. 560.

61 Vgl. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychnischer Streit. S. 561f. Brennecke, a.a.O. Biedermann, Hermenegild M.: Eutyches, 1. E. Sp. 122f. Young, Frances: Eutyches. S.667. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 83.

62 Vgl. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychnischer Streit. S. 562. S.a. Brennecke, a.a.O. Young, a.a.O.



先ず簡単な説明とエウテュケースに関する重要な審理記録の写しを含む手紙を送った後、二度目の手紙で教会会議の全ての書類を送った。<sup>63</sup> レオ1世はこれらの資料に基づいて、エウテュケースが重大な誤りを犯している事を確信し、受肉後のキリスト両性論を力説した有名な「フラビァノスへの手紙 (Tomus ad Flavianum)」を449年6月13日フラビァノスに送った。<sup>64</sup> エウテュケースとディオスコロスの働き掛けに応じた皇帝テオドシウス2世が449年8月8日エフェソスでディオスコロスを議長とする第2エフェソス公会議を招集し、ディオスコロスは両性論の全ての代表者達を閉め出し、レオ1世の手紙を使節団が読み上げる事を阻止し、彼の決定に抗議する主教は番兵の脅しで萎縮させ、会議を完全に自己の統制下に置いてエウテュケースを復権させると同時に、フラビァノスを始めキュリオスの12のアナテマに反対するアンティオキア派の主教達を罷免した。<sup>65</sup>

レオ1世は修道生活を送っていたテオドシウス2世の姉プールケリア (Αυλία Πουλχερία, 399 - 453) に送った手紙の中で第2エフェソス公会議について「審理ではなく、盗賊会議 (non iudicium sed latrocinium)」<sup>66</sup> と批判して更なる公会議の必要性を説いた。450年7月28日テオドシウス2世が死去し、プールケリア<sup>67</sup> が修道院を出てマルキアヌスと結婚して彼が皇帝に即位すると、450年9月1日二人はニカイア (現在のトルコのイズニク Iznik) での公会議を招集したものの、皇帝はバルカン半島北西部に侵入したフン族への対応によって身動きが取れず、また、主教達は延期による騒乱の発生を懸念し、ローマ司教の使節団

---

Reinhardt, a.a.O.

63 Vgl. Wickham, a.a.O.

64 Vgl. ebd. Brennecke, a.a.O. Young, a.a.O. Reinhardt, a.a.O. Gahbauer, Ferdinand R. : Tomos Leonis. In: LM. 8, Sp. 855f. Price, Richard: Tome of Leo. In ODCC. 2, S. 1954.

65 Vgl. Wickham, Lionel R. : Eutyches / Eutychianischer Streit. S. 563f. Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. Sp. 1351. Stockmeier, Peter: Ephesos, Synoden/Konzilien. In: LM. 3, Sp. 2050ff., hier Sp. 2052. Price, Richard: Ephesus, Second Council of. In: ODCC. 1, S. 638. Reinhardt, a.a.O.

66 Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. Sp. 1351. Price, a.a.O.

67 プールケリアについては次の文献も参照した。

Schmalzbauer, Gudrun: Pulcheria. In: LM. 7, Sp. 323.

は皇帝の出席に飽くまでも拘ったため、9月22日公会議の場所を現在のイスタンブールのアジア側の一部に当たるカルケドン(Χαλκηδών)に変更した。<sup>68</sup>451年10月8日から11月11日迄開催された公会議には、それまでで最多の600から630人の主教達が出席したとされるが、教理決定の署名では452名(ギリシア語版)又は449名(ラテン語版)となっている<sup>69</sup>。しかし出席者の中で西方教会に属する者は、レオ1世が東方で行われる公会議に不承不承送った使節団を除いては、ヴェンダル人の侵入によって北アフリカから逃れてきた2人の司教のみであった。<sup>70</sup>その他に、皇帝の名に於いて公会議を監督し、皇帝が判断する際の根拠となる報告を行う為、皇帝によって指名された非聖職者の19人の委員が参加した。<sup>71</sup>

会議ではまず449年のエフェソス公会議での決定は無効とされ、ディオスコロスは10月13日の第3回会議に於いて教義上の理由ではなく、公会議に対し責任を負うべき立場でありながら公会議を無視したという規律上の理由で罷免、追放された。<sup>72</sup>

皇帝の委員達は第1回会議から皇帝の意向として、アンティオキア学派とアレクサンドリア学派の思想を統合する様な、ニカイア信条とコンスタンティノポリス信条(ニカイア・コンスタンティノポリス信条)に適した、また、第1エフェソス公会議で承認公表されたアレクサンドリア総主教キュリオスのネストリオスに宛てた第2及び第3の手紙の内容を加えた新たな信条を作るよう要請したのに対し、主教達は様々な理由からこの無理な要求に反対したが、紆余曲折の後、結局、更にレオ1世のフラビアノスへの手紙の内容を加味した信条

---

68 Vgl. Wickham, Lionel R.: Chalkedon. In: TRE. 7, S. 668 - 675, hier S. 668f.

69 Vgl. Wickham, Lionel R.: Chalkedon. S. 669. 但し、シュトックマイアーは約350人、プライスは約370人としている。Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. In: LM. 2, Sp. 1651 - 1654, hier Sp. 1652. Price, Richard: Chalcedon, Council of. In: ODCC. 1, S. 368f., hier S. 368.

70 Vgl. ebd. S.a. Stockmeier, a.a.O. しかしプライスは4名としている。Price, Richard: Chalcedon, Council of. S.368.

71 Vgl. Wickham, Lionel R.: Chalkedon. S. 669.

72 Vgl. Wickham, a.a.O. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1653. Ritter, Adolf Martin: Chalcedon, Konzil von 451. In: RGG. 2, Sp. 92f., hier Sp. 93. Price, a.a.O.

を作成し、承認された。<sup>73</sup>

カルケドン信条の要点は、両性に就いてキリストは混合する事も、変わる事も、分割される事も、分離する事もなく、両性の違いは受肉によっても決して解消されず、寧ろ両性それぞれの特質は保持されたまま、それらが結合して一つの位格（ペルソナとヒュポスタシス）<sup>74</sup>と成っている、と言う点にあるが<sup>75</sup>、これは神に2人の息子（キリスト）がいる事に繋がる神性と人性の分割という思想及び神が苦しみ得るといふ思想の双方を否定するため、また、神性と人性の融合という思想、及び、キリストが超人的な人性を取った、或いは、受肉以前は両性でその後は単性である、という思想を全て否定する為のものであった<sup>76</sup>。しかし、最終的に承認されはしたものの、レオ1世の手紙に基づく「両性の違いは受肉によっても決して解消されず、寧ろ両性それぞれの特質は保持されたまま、それらが結合して一つの位格（ペルソナとヒュポスタシス）と成っている」の部分<sup>77</sup>に関しては、特にイリュリアとパレスチナの主教達から表現が「二元論的（dualistisch）」<sup>78</sup>であるとの懸念が示され、また、後にこの部分が「ネストリオス的な（nestorianische）」分割キリスト論に対する過大な譲歩であると見做され、特にエジプトとシリアで長期にわたりこれに対する抵抗が続き、遂に帝国教会から離反し単性論を支持する、一国内にのみ活動が限定される国民教会（Nationalkirche）が形成される事となった<sup>79</sup>。

信条にレオ1世の手紙の内容が反映された事はローマ教会及び西方教会に

---

73 Vgl. Wickham, Lionel R. : Chalkedon. S. 669f. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1652f. Ritter, a.a.O. Price, a.a.O.

74 Vgl. Wickham, Lionel R. : Chalkedon. S. 673.

75 Vgl. Wickham, Lionel R. : Chalkedon. S. 671ff. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1653. Ritter, Adolf Martin: Chalcedonense, cliristologische Definition. In: RGG. 2, Sp. 93f., hier Sp. 94. Price, Richard: Chalcedon, the Definition of. In: ODCC. 1, S. 368.

76 Vgl. Wickham, Lionel R. : Chalkedon. S. 671. Price, a.a.O.

77 Vgl. Ritter, a.a.O.

78 Vgl. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1652.

79 Vgl. Ritter, a.a.O. S.a. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1654. Wickham, Lionel R. : Chalkedon. S. 672f.

としては大きな成果だったが、公会議ではローマ教会にとって不利な条規も決定された。27の条規は主として位階制の立場を強め、修道院を主教の効果的な監督下に置く為に、教会の秩序及び主教の裁治権と職務執行に就いて扱っており、その際東方教会の事情を念頭に置いていた為、第9・17条規はコンスタンティノポリス教会に特別な地位を与えた。<sup>80</sup>その後、ローマ司教の使節団と皇帝の委員達が不在中に、後に第28とされる条規が決定され、1.コンスタンティノポリス(新ローマ)は(古い)ローマと等しい世俗的権利と名誉を有するが故に、コンスタンティノポリス公会議の第3条規との一致に於いて、新ローマの教会は古いローマの教会に次ぐ地位にある事、2.ポントゥス、小アジア、トラキアの首都大主教はコンスタンティノポリス総主教から叙階を受ける事、3.この教区の帝国領土外に居住している主教もコンスタンティノポリス総主教によって叙階されるべき事、即ちコンスタンティノポリス総主教に、アレキサンドリアとアンティオキアを凌ぐ、ローマ司教と実質的に同等の地位が付与される事が規定された。<sup>81</sup>皇帝マルキアヌスが452年2月7日に勅令によってカルケドン公会議の決定を有効と認めたのに対し、レオ1世は453年3月21日に漸く、しかもコンスタンティノポリスからの圧力によって、コンスタンティノポリス教会の地位向上の部分を除いた信仰に関する部分に限って承認した。<sup>82</sup>

カルケドン公会議で、ローマ司教の主張が信条の一部に採用されたと言う点はローマ教会及び西方教会にとって大きな成果であったと言えるが、その一方でコンスタンティノポリス教会(総主教)に実質的にローマ教会(ローマ司教)と同等の地位が付与された事は、西ローマ帝国及びローマが政治的重要性を失いつつあった事実を反映していると言えるのである。

---

80 Vgl. Wickham, Lionel R.: Chalkedon. S. 673. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1653.

81 Vgl. Wickham, a.a.O. S.a. Price, Richard: Chalcedon, Council of, S.368. Stockmeier, a.a.O. Ritter, Adolf Martin: Chalcedon, Konzil von 451. Sp. 93.

82 Vgl. Stockmeier, Peter: Chalkedon, Konzil v. Sp. 1654. Ritter, a.a.O. Price, a.a.O.

#### 4. 結語

レオ 1 世の登場によって漸くそれまでのローマ司教とは異なる宗教的・政治的に有能な人物がローマ司教の座に着いた。アウグスティヌスの『神の国』はマニ教の二元論をキリスト教的に改訂したものと言っても過言ではないが、レオ 1 世はこの『神の国』を更に当時のローマに当てはめて改訂し、聖俗両界に於けるローマ司教の首位権の理論的根拠とした。また、西ローマ帝国の衰退はローマ司教に活躍の場を与え、彼は見事に時代の要請に応え、ローマ教会の西ローマ帝国内に於ける重要性を高めた。

レオ 1 世は東方教会の内紛にもうまく対処し、カルケドン信条に自らの思想を反映させる事に成功した。しかしその一方で、西ローマ帝国及びローマの衰退に伴い、コンスタンティノポリスの政治的重要性が相対的に高まり、カルケドン公会議でコンスタンティノポリス教会にローマ教会と実質的に同等の地位が与えられた。この後の西ローマ帝国の滅亡によってローマ教会はいよいよ時代に翻弄される事となる。

\*本研究は JSPS 科研費 23520393 の助成を受けたものである。

The social contexts of *The Flowing Light of the  
Godhead* by Mechthild of Magdeburg (8)  
— Papal Primacy (5) —

Karino, Toshihiro

Unlike his predecessors as Bishop of Rome, Leo I was a man of ability in both religion and politics. We can say that Augustine had adapted Manichaean dualism for Christianity in *The City of God*. Leo I adapted *The City of God* for fifth-century Rome, and established grounds for claiming the primacy of the Bishop of Rome in terms of both religion and politics. The decline of the Western Roman Empire gave him the opportunity to play an active role in politics, and his remarkable services enhanced the importance of the Roman Catholic Church within the Empire.

Leo I responded adroitly to the confusion in the Eastern Church, and secured the adoption of his ideas into the Chalcedonian Creed. On the other hand, because the political importance of Constantinople had increased with the decline of Rome and the Western Roman Empire, the Church of Constantinople was given substantially the same position as the Roman Catholic Church. The Roman Catholic Church would be buffeted more and more by political instability following the fall of the Western Roman Empire.